

2019 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	丹下 悠史
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻 博士課程前期課程 修了	修士 (教育学)	教育方法学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

「真に信頼して事を任せうる人材」・「真面目」な人間の育成を包括的な目標として、「子弟を教育するは、私事に非ず。天に事（つか）うるの職分なり」の精神にもとづき、教育活動を通して学生一人ひとりの将来像の追究を手助けする。

とりわけ中高教職課程の指導について、教科の指導力や基礎学力の育成、モチベーションの維持向上等、学生の万全なサポートに努め、本学の専門教育を生かしたオンリーワンの教員養成を目指す。

(計画)

学生が納得感・達成感を得ながら資質・能力を高めていけるよう、以下の点に取り組む。

- ・学生一人ひとりが自らを学習の主体として意識できるよう、課題へのフィードバックや学習内容の外化（発表、グループワーク、課題作成）を授業の各回に取り入れる。
- ・学生の ICT スキルと計画的な目標遂行能力を向上させるため、Google クラウド等 ICT ツールを活用し、時間外学習の実質化、授業の効率化・活性化を図る。

○担当科目（前期・後期）

(前期)

教育学概論、教育経営論、教育方法論、道德教育の理論と方法、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期)

教職概論、教育経営論演習、教職実践演習（中・高）、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究

○教育方法の実践

計画にもとづき、課題へのフィードバックや学習内容の外化（発表、グループワーク、課題作成）を授業の各回に取り入れた。また、講義形式の授業では Google クラウドを使って資料の提示や課題の管理を行い、学生の ICT スキルの底上げを図った。

○作成した教科書・教材

担当科目である教育学概論、教育経営論、教育方法論、道德教育の理論と方法、教職概論、教育経営論演習、教職実践演習（中・高）、専門演習Ⅰ～Ⅳについては、参考資料を適宜紹介しつつ基本的にはオリジナルの授業用資料を作成し、授業を行なった。

○自己評価

計画通りに実施することができ、おおむね目標を達成することができた。特に 1 年生対象の授業においては ICT ツールを用いる活動を取り入れることで、ICT の活用に関する知識や技術の個人差を緩和し、他の学習活動にも役立てることができたと考える。

II 研究活動

○研究課題

「学習対象への自我関与に着目した道徳教育の分析・評価手法の開発」

○目標・計画

(目標)

小学校および中学校の道徳授業における子どもの発言や記述から、その内容の背後に介在する道徳的価値観・判断の特質や、授業を通じたそれら相互の影響関係を可視化する手法を開発することで、道徳授業における自我関与の成立要因を明らかにする。また、開発された手法を応用し、教師がそれを用いることで子どもの学習の過程を詳細に把握し評価することのできる研修方法を構築する。

(計画)

年度前半は、既存のデータや資料を用いて引き続き授業分析手法の開発を進めることと並行して、小中学校でフィールドワークを行い授業のデータを得る。年度後半は、以上の活動と同時に、所属学会や東邦学誌等の場において研究成果の報告を積極的に行う。

○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

(著書)

(学術論文)

- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子（2019）「リアクションペーパーから見る学びの実態と思考を促す要因——国立工科大学におけるキャリア科目を事例として」『大学教育学会誌』41(1), 147-156.
- ・丹下悠史（2018）「道徳教育における読み物資料のモデルとしての機能」『平成28年度 大学院生の教科書研究論文助成金論文集』公益財団法人教科書研究センター.
- ・丹下悠史（2017）「道徳教育における教師の授業洞察力を高める研修方法の開発」『東邦学誌』46(2), 159-168.
- ・小出禎子・丹下悠史（2017）「小中連携教育における学校経営--校長から見た「子どもの学び」と「教師の学習」に関する意義と課題を中心に」『東邦学誌』46(1), 17-27.
- ・柴田好章・須田昂宏・丹下悠史・中道豊彦・水野正朗・深谷久美・野村昂平・胡田裕教・坂本篤史（2016）「授業記録にもとづく授業分析のための手法に関する試験的研究」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』62(2), 87-106.
- ・丹下悠史（2014）「問題解決学習の道徳教育としての意義と課題」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻，修士学位論文.
- ・柴田好章・中道豊彦・水野正朗・副島孝・坂本篤史・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・堀田貴之・横山真理・近藤茂明・深谷久美・タン シャーリー・野村昂平・満田清恵・キララン チワリ（2014）「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』60(2), 105-128.
- ・的場正美・柴田好章・水野正朗・中島淑子・堀田貴之・近藤茂明・福村美希・新谷裕・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪・伊倉剛（2012）「子どもの発言に内在する授業諸要因の抽出に関する事例研究」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』59(1), 121-149.

(学会発表)

- ・丹下悠史（2019）「道徳教育における子どもの自我関与の分析と評価」中部教育学会第68回大会
- ・坂本將暢・丹下悠史・柴田好章・埜寄志保・水野正朗・向井昌紀・石黒慎二・徐曼（2019）「授業

における子どもの認識の展開過程の可視化ーオントロジーを利用してー」日本教育方法学会第 55 回大会

- ・丹下悠史 (2018) 「学習対象への自我関与を通じた子どもの価値観の形成ー地域社会の問題を追究する中学校公民の授業を事例に」日本教育方法学会第 54 回大会
- ・Kikuchi M, Suda T, Tange Y, Murakami K, “An Analysis of student’ learning in career course with comment sheets” The World Association of Lesson Studies International Conference 2017
- ・菊池美由紀・須田昂宏・丹下悠史・村上恭子 (2017) 「大学のキャリア科目における学生の学びの可視化ーコメントペーパーの分析を通して」日本キャリア教育学会第 39 回研究大会
- ・丹下悠史 (2016) 「学校教育における直接経験の道德教育的機能の検討」日本教育学会第 75 回大会
- ・丹下悠史 (2016) 「読み物資料の道德教育的効果に関する一考察：現実のモデルとしての役割に着目して」中部教育学会第 65 回大会
- ・丹下悠史 (2015) 「社会科授業における子どもの道徳的意思決定プロセスの分析」日本教育方法学会第 51 回大会
- ・Tange Y, “Deepening Analysis students learning process in Moral Education by means of ‘Transcript-Based Lesson Analysis (TBLA)’” CitizED International Conference 2015
- ・Tange Y, “Transcript-based Lesson Analysis: Pathway for Research on Student Thinking and Learning Process Focusing on Student’ s Set of Values” The World Association of Lesson Studies International Conference 2014
- ・水野正朗・丹下悠史・柴田好章 (2014) 「対話において差異性が重要なのはなぜか：諸概念の動的な相互関連構造の形成」日本協同教育学会第 11 回大会
- ・丹下悠史・水野正朗・田中眞帆・柴田好章・胡田裕教 (2014) 「オントロジーを援用した授業分析手法の提案ー複雑な対立関係にある発言間の関連構造の解明」日本教育方法学会第 50 回記念大会
- ・柴田好章・坂本篤史・須田昂宏・付洪雪・丹下悠史・副島孝・中道豊彦・水野正朗・埜寄志保 (2013) 「中間項による授業の記述とデータ解析に関わる諸問題の検討」日本教育方法学会第 49 回大会
- ・Tange Y, “Moral Education in a Junior High School Social Studies Lesson: Impact of Ueda’s theory in Practice” The World Association of Lesson Studies International Conference 2013
- ・柴田好章・中島淑子・須田昂宏・埜寄志保・丹下悠史・付洪雪 (2013) 「中間項を用いた授業分析における解釈の明示化」中部教育学会第 62 回大会

(特許)

(その他)

- ・丹下悠史 (2013) 「上田薫の道德教育論についての研究ノートー『動的相対主義』に着目して」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』56, pp. 27-36.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

- | | |
|---|-----|
| ・平成 32 年度 若手研究 (新規) (研究代表者) | 申請 |
| ・平成 31 年度 愛知東邦大学 地域創造研究所 共同研究助成 (共同研究者) | 採択 |
| ・平成 31 年度 基盤研究 (B) (一般) (新規) (研究分担者) | 採択 |
| ・平成 30 年度 愛知東邦大学 地域創造研究所 共同研究助成 (共同研究者) | 採択 |
| ・平成 29 年度 研究活動スタート支援 (新規) (研究代表者) | 不採択 |
| ・平成 29 年度 基盤研究 (B) (継続) (研究分担者) | 採択 |

・平成 28 年度 (公財) 教科書研究センター大学院生の教科書研究論文助成金 採択

○所属学会

中部教育学会、日本教育方法学会、日本教育学会、World Association of Lesson Study

○自己評価

目標を部分的に達成することができたものの、次年度以降の課題を多く残すことになった。予定していたフィールドワークを行うことができなかつたため、次年度は実践の観察・分析に取り組みたい。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

学部学科、委員会、全学的業務といったそれぞれの領域で、他の教職員から学びながら与えられた役割を果たす。

(計画)

所属学部、委員会、その他ワーキンググループ等の目標に即し、授業等を通して主たるステークホルダーである学生の要望を意識しながら、積極的に運営に参加する。

○学内委員等

教務委員会委員、中高教職課程委員会委員、教職支援センター運営委員会委員、入試問題作成委員会委員、設備更新 WG

○自己評価

おおむね目標を達成することができた。上記の委員会の他、学部 FD、オープンキャンパス等の学内業務に取り組み、円滑な運営に貢献した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果を研究職や教育職のコミュニティ、市民社会において広く共有することを目指す。

(計画)

所属する国内、国際学会での研究発表を通して、研究成果を共有する。教員免許更新講習の運営・講義に取り組む。高校へ出張講義やコミュニティカレッジを通して地域社会への知識の還元、関心の喚起を図る。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

- ・教員免許状更新講習講師
- ・高大連携授業開講
- ・「社会科の初志をつらぬく会」東海研究部事務局長
- ・稲沢市立大里中学校 現職研修 講師

○自己評価

目標をおおむね達成することができた。とりわけ本年度は民間教育研究団体「社会科の初志をつらぬく会」東海研究部事務局長、中学校の現職研修講師を務めるなど、学外において学校教員と協同し教育実践の改善への取り組みに参加することができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

2018年度は停滞傾向にあった博士論文の執筆に向け、調査や資料の分析ならびに学外の研究コミュニティへの積極的参加、業務の効率化・省力化に努める。

また、教育活動の効果をより高めるために、多様なレディネスの学生が大学らしい主体的な学習に取り組めるための方法を調査し、試行・整理することを目指す。

VI 総括

着任3年目を終え、教育や学務といった担当業務について全く未経験のものに取り組むことが少なくなった。教育に関しては、講義科目は資料や教材を充実させることができ、授業評価アンケートの結果もそれに伴い改善の傾向にある。一方でゼミ指導については様々な分野に関わる卒業研究の指導を効果的に行うことの難しさを感じ、今後の課題としたい。研究は、学会発表・論文投稿の形で最低限のアウトプットを保っているものの、目標に対しては十分に進められなかった。大学運営および社会貢献については、経験の量によるところが大きく、以前よりも参加・貢献の度合いが高まったと考える。

次年度の目標として、研究・教育（授業を主とした学生指導）・社会貢献（学校との協同）において、一つの領域の成果を他の領域に反映させることで、循環的にそれぞれの仕事の質を高めたいと考える。研究においては今日的な課題を見据えたレリバンスの高い成果を上げ、教育・社会貢献においては学術的な成果にもとづく指導や支援を行えるように努めたい。

以 上